第５学年　国語科学習指導案

日　時　平成２０年９月３０日（火）５校時
児　童　５年生　１７名
指導者　五日市　倫子

１　単元名　　人物の考え方や生き方をとらえよう
　　教材名　　わらぐつの中の神様

２　単元について
（１）教材について
　第５学年及び第６学年の「Ｃ読むこと」の目標は、「目的に応じ、内容や要旨を把握しながら読むことができるようにするとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる」ことである。
　本単元で育てたい主となる能力は、「ウ．登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読むこと」である。そこで、本教材の学習を通して「登場人物の人柄や場面の情景を、叙述に即して読むこと」と「現在―過去―現在という物語の構成とその効果について理解すること」を目標としている。
　本教材は、心の通じ合いをテーマにした作品である。「人の身になって尽くす心を大切にして生きることが尊いのであり、人間にとって幸せなのである。」が主題となる。
　この物語は、「現在―過去―現在」という構成の中の「現在」においてマサエを物語の聞き手として登場させている。わらぐつや神様に対して「みったぐない。」「そんなの迷信でしょ。」と行っていたマサエが、おばあちゃんの昔語りである「わらぐつの中に神様のいなった話」に登場するおみつさんのわらぐつに込めた思いや態度、若い大工さんの物の見方や考え方からおばあちゃんの伝えたかった神様の意味をうけとめていく。
　このころの児童は、異性に対する意識が高まり、特定の人に対するあこがれの気持ちや向き合うとはずかしいような照れくさいような、それでいてうれしいような淡い恋心のようなものはほとんどの児童が分かるはずである。また、まっすぐな心、純粋な心、深い思いやりの心など、目に見えない心のあり方についても、価値を認める児童は多いと思われる。
　この作品を文章と対話しながら読み進める中で、言葉のもつ意味や響きから情景や心情を豊かに想像する力、自分と友達との考えと比較して読み深める力、同じ作者やテーマに沿った作品に親しみをもち、進んで読書をしようとする意欲につなげることができる教材であると考える。
（２）児童について
　児童は五年上の「サクラソウとトラマルハナバチ」の学習を通して、「初め・中・終り」という文章構成を捉えた上で、読み取ったことに対する自分の考えを持つ活動をしてきた。また、「新しい友達」においては、登場人物の心情に寄り添い対話しながら叙述に即して読み取り主題について考える活動をしてきた。これらの学習を通して、児童は、主人公の気持ちを想像したり、筆者が述べたいことをまとめたりする力が徐々についてきている。しかし、叙述をもとにして自分の考えを書いたり発表したりすることにまだ抵抗を持っている児童は少なくない。
　これらの学習では、読み取りの際に主語やキーワードに着目してサイドラインを引いたり、ノートに書き抜きや書き込みをしたり、要旨をまとめる力がついてきている。また、叙述をもとに登場人物の心情を想像しながら根拠を持って答えられるようになってきている。しかし、感想を自分の言葉で表現するのが難しく支援が必要な児童もいる。
　４年生時に実施したＣＲＴの読む能力の得点率は７１．２点で、特に劣っているところは初めての文章を読み、その表現の読み手に与える効果を考えること、主述の関係を理解し、隠れた主語を読み取ることである。読解力事前テストでは、平均６８．８点である。事前テストの結果から、指示語の前後の文章内容からその指示語が指す文章を捉えることと、二つの文末表現を比べてその違いを明確に表現することが苦手である。また、叙述に沿わず思い込みで答える傾向が伺える。

（3）指導にあたって

本教材の指導にあたって、児童が感じたことや考えたことを発表させたり、話し合わせたりすることで、作品のおもしろさを多面的に捉えさせたい。そのために、文や言葉を根拠にして考えを述べるようにさせ、全体での話し合いを深められるようにしていきたい。

「つかむ・見通す」段階では、初発の感想から課題作りをし、主題についても考えさせる。物語のあらすじをまとめ「現在―過去―現在」という構成を捉えさせる。

「深める」段階では、「心情が分かる言葉や文」の見つけ方について振り返っておきたい。また登場人物の心の動きや通じ合いを捉える上で擬態語、擬音語、比喩、慣用句などの豊かな表現にも着目させ、サイドラインや書き抜き、書き込みをさせながら登場人物の考え方や聞き方を叙述に即して読み取らせていきたい。

「まとめる」段階では、これまでに読み取ってきたことから、主題にせまり「つかむ・見通す」段階で書いたものと比較し、学習の成果を確認したい。

「広げる」段階では、関連図書を紹介し読書活動につなげたい。

3　単元の目標

【関心・意欲・態度】

○　物語の温かさに惹かれて、心に残る言葉や文章、情景や場面を楽しんで読もうとしている。

【読むこと】

◎　登場人物の人柄や場面の様子、情景を叙述に即して読み自分なりの感想を持つことができる。

【書くこと】

○　全体を通して、書く必要のある事柄を整理してまとめることができる。

4　単元の指導計画（全 10 時間）

段階	時	学習活動	具体の評価規準	努力を要する児童への支援
つかむ・見通す 2	1	全文を読み、登場人物の人柄を想像する。初発の感想を書き発表する。主題について考える。新出漢字を確認する。 ◇感想 ◇主題についての考えを書く。	関・読：初発の感想を書いている。また、友達の感想を聞きながら自分と似ているところ、違うところを見つけ出す。主題について自分なりの考えを書いている。	自分が登場人物だったらという視点で書く方法もあることをアドバイスする。
	2	物語の大体のあらすじをまとめる。初発の感想をもとに課題作りをする。 ◇物語の大体をつかむ（時を表す言葉に沿ってあらすじをまとめる。） ◇課題作りをする	関・書：課題作りに意欲を持って取り組んでいる。また、時を表す言葉を基に話の大体をまとめている。	時を表す言葉に着目させ、話の流れを簡単にまとめることであることに気づかせる。

深める 6	3	マサエとおばあちゃんのわらぐつに対する見方の違いを考える。 ◇サイドライン ◇抜き書き ◇書き込み	関・書：マサエとおばあちゃんのわらぐつに対する見方が分かる叙述を見つけ出し、その違いについてまとめている。	マサエがわらぐつに対して否定的な表現をしているところはないか考えさせる。
	4	どうしても雪げたがほしいと思うおみつさんの心の高まりを読み取る。 ◇サイドライン ◇抜き書き ◇書き込み	関・書：どうしても雪げたがほしいというおみつさんの思いが分かる叙述から、その心の高まりをまとめている。	挿絵をもとにしながらおみつさんの雪げたに対する思いが分かる会話や行動に着目させる。
	5	自分で働いて雪下げたを買おうと決心し、努力する姿からおみつさんの人柄を読み取る。 ◇サイドライン ◇抜き書き ◇書き込み	関・書：おみつさん心情が分かる叙述からその人柄をまとめている。	わらぐつを編むおみつさんの様子に着目させ、どんな思いを込めて編んでいるか考えさせる。
	6	朝市でわらぐつを売っている時のおみつさんの心の動きを読み取る。 ◇サイドライン ◇抜き書き ◇書き込み	関・書：朝市での周りの評判とおみつさんの心情が分かる叙述から、初めてわらぐつが売れた時のおみつさんのうれしさをまとめている。	おみつさんの作ったわらぐつに対する否定的な評判に着目させ、売れたときの心情を考えさせる。
	7	わらぐつを通してのおみつさんと大工さんの心の結びつき読み取る。 ◇サイドライン ◇抜き書き ◇書き込み	関・書：大工さんの言葉やおみつさんとの会話をもとに二人の生き方の重なり合いや結びつきをまとめている。	大工さんの仕事に対する考えが分かる会話文に着目させ、それがおみつさんの作ったわらぐつとどう結びつくか考えさせる。
	8 本時	マサエの心情の変化を読み取る。 ◇サイドライン ◇抜き書き ◇書き込み	関・書：おばあちゃんの話や会話から、マサエの心情の変化を読み取りまとめている。	「そんなの迷信でしょ」。と言っていたマサエの気持ちの変化に着目させ心情の変化を考えさせる。
まとめる 1	9	読んで学んだことを題材にして、感想をまとめ発表する。主題について考える。 ◇感想をまとめる。	読・書：今までの学習をもとに、感想をまとめている。主題について考えている。	題名「わらぐつの中の神様」とは何を指しているのか今までの学習から考えさせる。
広げる 1	10	関連図書を読む。	関：関連図書を探し進んで読んでいる。	関連図書のブックトークを行う。

5　本時の指導

（1）本時の目標

【関心・意欲・態度】

○ おばあちゃんの話や会話をもとに、マサエの心情の変化を読み取ろうとしている。

【読むこと】

○ おばあちゃんの話や会話をもとに、マサエの心情の変化を読み取りまとめる。

（2）本時の書く活動

本時では、おばあちゃんの話や会話をもとにマサエの心情の変化をまとめる活動を行わせる。まず、マサエの心情の変化に関わるおばあちゃんの話や会話を見つけ出させサイドラインを引かせ、抜き書きをさせる。次に、課題解決に関わるマサエの心情の変化の内心語を書き込むませることによりまとめの書く活動へつなげたい。

（3）本時の展開

◇主となる「書く活動」に関わる部分　　☆支援　　〇評価

段階	学習活動	教師の発問と指示	予想される反応	評価と支援
つかむ 5分	1．一の場面の学習を想起する。 2．本時の学習課題を確認する。 マサエの心はどのように変わったのだろう。	・初めの場面でのマサエは、「わらぐつ」や「神様」という言葉に対してどのように思っていましたか。	・みったぐない。 ・そんなの迷信。	☆一の場面でのマサエの「わらぐつ」や「神様」に対する考え方を想起できるように教室掲示を活用する。
見通す 2分	3．学習場面の見通しをもつ。	・おみつさんはその後、大工さんとどうなりましたか。 ・おみつさんと大工さんは実は誰のことだったのですか。 ・課題を解決するためには、何を見つけていけばいいですか。	・大工さんのところへおよめにいっって、幸せにくらした。 ・おばあちゃんとおじいちゃんのことだった。 ・マサエの会話、様子、行動。 ・おばあちゃんの話やお母さんとの会話、様子、行動。	
深める 30分	4．学習場面の音読をする。 指名読み 5．課題解決のための読み取りをする。 （1）マサエの心が変化したことが分かる言葉をおさえる。 （2）マサエの心を変化させたおばあちゃんの話や会話で課題に迫るものを選び、サイドラインを引き発表する。 ◇サイドライン	・マサエの気持ちの動きに寄り添いながら音読をしましょう。 ・マサエの心がすごく変わったと思われる言葉は何ですか。 ◎マサエの心を変えたおばあちゃんの話や会話にサイドラインを引き発表しましょう。	・「この雪げたの中にも、神様がいるかもしれないね。」 ・使う人の身になって、心をこめて作ったものには、神様が入っているのと同じ。 ・それを作った人の、神様と同じ。 ・神様みたいに大事にするつもり。 ・なかなかはく気になれなかっ	〇マサエの心を変化させた話や言葉にサイドラインを引き抜き書き、書き込みをすることができたか。 （教科書・ノート） ☆おばあちゃんの話や言葉から自分が感じたことはないか考えさせる。

深める 30分	（3）抜き書きをし書き込みをする。 ◇抜き書き ◇書き込み （4）書き込みを発表する。		た。 ・はけなくなっても、こうして大事にしまっとくんだよ。 ・「心」や「神様」は目には見えないけれど大切なこと。 ・使う人を思いやることのできるおみつさんの心も神様と同じ ・おじいちゃんが頑張って働いて買ってくれたものだから、心がこもっている。 ・おばあちゃんにとって何よりも大事な宝物。 ・雪げたの中に大切な思い出。	
	（5）マサエの心の変容を考える。	◎マサエの心は、どのように変わったのか考えましょう。		○自分の考えや友だちの発表をもとにマサエの気持ちの変容を考えることができたか。（発言）
まとめる 8分	6．まとめを書く。 7．まとめを発表する。 マサエは、目には見えないけれど心がこもっているものこそが大切なのだと思うことができるようになった。 8．まとめの音読をする。（一斉読み） 9．自己評価をする。 10．次時の学習内容を確認する。	◎課題に対するまとめを書きましょう。 ・まとめを発表しましょう。		☆課題に戻り何をすべきか把握させる。 ○おばあちゃんの話や言葉から、目に見えなくてもすばらしく尊いものがあることを感じ取っていたことに触れながらまとめることができたか。（ノート） ・まとめを発表する。 ☆次時の学習内容の予告をし、学習への意欲を持たせる。

（4）本時の評価

【読むこと】

○　おばあちゃんの話や会話をもとに、マサエの心情の変化をまとめることができたか。

（ノート、発言）

A　十分満足できる	B　概ね満足できる	C　努力を要する児童への支援
おばあちゃんの話や会話をもとに、課題に迫る内心語を書き込み発表し、マサエの心情の変化を進んでまとめることができたか。	おばあちゃんの話や会話をもとに、マサエの心情の変化をまとめることができたか。	一の場面でのマサエの様子をもとにしてその変容を考えさせる。

（5）板書計画

人物の考え方や生き方をとらえよう

わらぐつの中の神様

杉　みき子

マサエの心は、どのように変わったのだろう。

現在

幸せにくらしている

おみつさん→おばあちゃんのこと

大工さん→おじいちゃんのこと

わらぐつ・・・みたぐない

神様・・・・・迷信

目には見えないもの

使う人の身になって、心をこめて作ったものには、神様が入っているのと同じこんだ。それを作った人も、神様とおんなじだ。

だけど、あんまりうれしくてもったいなくてね。なかなかはく気になれなかった。

思い出

はけなくなっても、こうして大事にしまっとくんだよ。

雪げた・・・おじいちゃんがおばあちゃんのために、せっせと働いて買ってくれたんだから

神様がいるかもしれない。

マサエは、目には見えないけれど心がこもっているものこそが大切なのだと思うことができるようになった。

五年国語教材文「わらぐつの中の神様」の教材分析ＮＯ・１

場面	あらすじ	教材文	指導事項	言語事項
一の場面 （現在）	外は静かに雪が降っている。家の中でおばあちゃんが「わらぐつなんてみったぐない」というマサエにむけて、「わらぐつの中に神様がいなった話」を始める。	雪がしんしんとふっています。 マサエは、おばあちゃんといっしょにこたつにあたりながら、本を読んでいました。 今夜は、お父さんはとまり番で帰ってきません。おふろ好きのおじいちゃんは、「この寒いのに―。」と、みんなに笑われながら、さっきおふろ屋さんへ出かけていきました。あとは、お母さんが台所で夕ご飯の後かた付けをしている音が聞こえるだけで、辺りはとても静かです。 風が出てきたらしく、まどのしょうじがカタカタと鳴りました。雪がサラサラと雨戸に当たっては落ちていきます。 マサエは、ふと思い出して、台所のお母さんをよびました。 「お母さん、わたしのスキーぐつ、かわいてる。あした、学校でスキーの日だよ。」 お母さんが、水音を立てながら答えました。 「おや、あしただったの。それじゃ、もう一度見てごらん。さっき、新聞紙を丸めて入れといたから、あらかたかわいたと思うけど。」 マサエは夕方まで、友達と近くのおかでスキーをしていました。今日は一度しか転ばなかったので、スキーぐつもズボンも、そんなにぬれないつもりでしたが、帰ってきて見たら、やっぱりいつものようにぐっしょりになっていたのです。 「かわいてるといいけどな。あんなにおそくまで、すべってなきゃよかった。」 マサエは、独りでそんなことを言いながら台所へかけていって、しきいに立てかけてあるスキーぐつから、しめっぽい新聞紙の玉を五つ六つ取り出して、手をつっこんでみました。くつの中はじわりと冷たくて、せなかまでぶるっとなりそうです。 「うへえ、冷たあい。お母さん、どうするう。」 「新しい新聞紙とかえてごらん。ひものところも、しっかりくるむようにしてね。あしたまでには、なんとかかわくだろ。」 「かわくかなあ。なんだか、まだびしょびしょみたいだよ。」 すると、茶の間のこたつから、おばあちゃんが口を出しました。 「かわかんかったら、わらぐつはいていきない。わらぐつはいいど、あったかくて。」 「やだあ、わらぐつなんて、みったぐない。だれもはいてる人いないよ。だいいち、大きすぎて、金具にはまらんわ。」 マサエは、大きな声で言いながら、たんすのそばに重ねてある新聞紙を取ってきて、くるくる丸めては、せっせとスキーぐつの中につめこみました。ぎゅうぎゅう力を入れておしこむと、ぬれた	（想）外は静かに雪が降っている。 （事）「冬の夜」 （想）寒いのにおふろ屋さんへでかけているおじいちゃん （事）夕食後の静かな様子。 （事）さらさら →寒い （音）（想）お母さんに頼り甘えているマサエの様子。 （事）わらぐつに対するおばあちゃんの考え。 （事）わらぐつに対するマサエの考え。	・しんしんと ・雨戸 ・ふと ・おや ・じわりと ・口を出す ・わらぐつ ・せっせと ・おしこむ

五年国語教材文「わらぐつの中の神様」の教材分析ＮＯ・２

場面	あらすじ	教材文	指導事項	言語事項
		ビニル皮がぽっこりとふくらんで、まだいくらでも入りそうです。 おばあちゃんが、また言いました。 「そういったもんでもないさ。わらぐつはいいもんだ。あったかいし、軽いし、すべらんし。そうそう、それに、わらぐつの中には神様がいなさるでね。」 「わらぐつの中に、神様だって。」 マサエは、新聞紙の玉をすっかりつめこんでしまって、こたつへもどってきました。ぬれた物をいじった手が、つうんとこおりそうです。 「そんなの迷信でしょ、おばあちゃん。」 「おやおや、なにが迷信なもんかね。正真正銘、ほんとの話だよ。」 おばあちゃんは、まじめな顔になって、眼鏡を外しました。 「それじゃあ、ひとつ、わらぐつの話をしてやるかね。わらぐつの中に神様のいなった話をね。」 そこへ、お母さんも台所をすませて、赤くなった手をふきふき、こたつへ入ってきました。 「どれどれ、わたしも聞かせてもらいましょうかね。―そういえば、おじいちゃんは、おふろおそいわね。こんでるのかしら。」 「なあに、おじいちゃんは昔から長湯が好きでね。こもうとこむまいと、ゆっくりたのしんでなるのさ。じゃあ、話そうかね。」 おばあちゃんはそう言って、雪の音にちょっと耳をすましてから、こんな話を始めました。	(事)わらぐつに対するおばあちゃんの考えや思い (想)マサエは神様という言葉にあきれている。 (想)「赤くなった手」→水仕事の冷たさ。	・迷信 ・正真正銘 ・いなった ・耳をすます
二の場面 (過去)	朝市に出かけたおみつさんがげた屋で見かけた雪げたをたまらなく欲しくなり、両親に話してみるが買ってはもらえない。	―昔、この近くの村に、おみつさんというむすめが住んでいました。おみつさんは、特別美しいむすめというわけでもありませんでしたが、体がじょうぶで、気立てがやさしくて、いつもほがらかにくるくると働いていたので、村じゅうの人たちから好かれていました。 さて、このおみつさんが、ある秋の朝、町の朝市へ、野菜を売りに出かけました。もう冬が近いので、すれちがう人たちも、なんだか気ぜわしそうに前かがみになって歩いていきます。おみつさんの足もそれにつられたように自然と速くなりました。 町に入るとすぐ四つ角に、げた屋さんがあって、大きなげたの形をした、すすけた看板が出ています。その前を通るとき、おみつさんはふと足を止めました。入り口近くの台の上に、かわいらしい雪げたが一足かざってあるのが目についたのです。 白い、軽そうな台に、ぱっと明るいオレンジ色のはなお。上品な、くすんだ赤い色のつま皮は、黒いふっさりとした毛皮のふち	(事)昔 (事)おみつさんについて (想)冬が近い→冬支度のため忙しそう (想)雪げた	・朝市 ・げた屋 ・四つ角 ・すすけた ・ふと ・目につく

五年国語教材文「わらぐつの中の神様」の教材分析ＮＯ・３

場面	あらすじ	教材文	指導事項	言語事項
		取りでかざられています。見ただけで、わかいむすめさんの、はなやかな冬のよそおいが、目の前にうかんでくるようです。 おみつさんは、その雪げたがほしくてたまらなくなりました。 「でも、きっと高いんだろうな。」 うら返しになっているねだんの札を、あかぎれの手でそっとめくってみると、思ったとおり、とてもとても、おみつさんのこづかいで買えるねだんではありません。「負けてくれと言ったって、とてもだめだろうしねえ―。」 おみつさんは、しばらくそこに立って、すい付けられたようにその雪げたをながめていました。 「いらっしゃいませ。何をあげますかいね。」 おみつさんがあんまり長いこと立っていたので、店のおくからおかみさんが出てきて声をかけました。おみつさんは、真っ赤になって、口の中で何かもごもご言いながら、にげるように店の前をはなれました。 けれども、市で野菜を売っている間も、あの雪げたのことが、おみつさんの頭をはなれません。いつもは、余計な物など、ほしいと思ったことのないおみつさんなのに、どうしたことか、この雪げたばかりは、なんとしてもあきらめきれないのです。 市の帰りに、おみつさんは、またあの店の前を通りました。ほかのお客にまぎれて、ちらりと目をやると、赤いつま皮の雪げたは、朝と同じ所に、ちゃんとぎょうぎよくならんでいます。 「ねえ、わたしを買ってください。あんたが買ってくれたら、うれしいな。」 おみつさんには、雪げたがそうよびかけているように思われました。 家にかえったおみつさんは、思い切って、お父さんとお母さんに、雪げたのことをたのんでみました。 「なんだ、雪げたなんて。そんなぜいたくなもん、わざわざ買うことはねえだろう。」 お父さんは、そう言って、相手にしてくれません。 「物ねだりをしたことのないおみつのことだから、買ってやりたいのはやまやまなんだけどね。―まあ、おまえが町へよめに行くようなことにでもなったらね―。」 お母さんは、言葉をにごしています。 「お姉ちゃんが買うんなら、おらにも買って。」 「きれいな雪げた、あたいもはいてみたいな。」 小さい弟と妹がわいわい言い出したので、おみつさんも、もう自分のねだりごとどころではなく、一生けんめい、子どもたちのな	(想)雪げたへのあこがれ (想)たまらない→ただ欲しいだけとは違う (想)そっとめくって→高価だろうと思っている (想)にげるように→今の自分ではとても手がとどかない (想)おみつさんの雪げたへの高まる思い (事)とても買ってもらえそうにない	・目の前にうかんで ・あかぎれ ・ながめる ・余計な物 ・ぜいたく ・言葉をにごして

五年国語教材文「わらぐつの中の神様」の教材分析ＮＯ・４

場面	あらすじ	教材文	指導事項	言語事項
三の場面	おみつさんは、自分でわらぐつを作り、それを売ったお金で雪げたを買おうと思い立つ。	だめ役に回らなくてはなりませんでした。 その夜、おみつさんは考えました。「うちのくらしだって、大変なんだもの。買ってもらえないのも無理はない。そうだ、自分で働いて、お金を作ろう。そして、あの雪げたを買おう。」 おみつさんのお父さんは、わらぐつを作るのが上手でした。おみつさんも、いつもそれを見ているので、作り方くらいは分かります。おみつさんはさっそく、毎晩、家の仕事をすませてから、わらぐつ作りを始めました。 お父さんの作るのを見ていると、たやすくできるようですが、自分でやってみるとなかなか思うようにはいきません。でも、おみつさんは、少しくらい格好が悪くても、はく人がはきやすいように、あったかいように、少しでも長もちするようにと、心をこめて、しっかりしっかり、わらを編んでいきました。 さて、やっと一足作りあげてみると、われながら、いかにも変な格好です。右と左と、大きさもちがうし、なんだか首をかしげたみたいに、足首の上のところが曲がっています。底もでこぼこしていて、ちゃんと置いてもふらふらするようです。その代わり、上からつま先まで、すき間なく、きっちりと編みこまれていて、じょうぶなことは、このうえなしです。 「そんなおかしなわらぐつが、売れるかいなあ。」 うちの人はそう言って、笑ったり心配したりしましたが、それでもおみつさんは、朝市の立つ日になると、野菜を入れた大かごにわらぐつを結び付けて、元気よく町へ出ていきました。 げた屋さんの前を通るとき、横目で見ると、あの雪げたは、まだちゃんとそこにありました。おみつさんは、その雪げたが、ほんのちょっぴり自分の手のとどくところへ出てきたような気がして、たのしくなりました。 それから、まっすぐに朝市へ出てきたおみつさんは、いつものがんぎの下に、むしろを広げて野菜をならべ、そのはしっこにわらぐつを置きました。そして、野菜を買ってくれる人があると、 「わらぐつはどうですね。」 とすすめてみるのですが、こちらはなかなか売れません。くすくす笑ったり、あきれ顔をしたりして、 「いいや、よかったでね。」 と断るのはまだいいほうで、なかには、 「へええ、それ、わらぐつかね。おらまた、わらまんじゅうかと思った。」 などと、あけすけなことを言う、口の悪い人もいます。「やっぱ	(想)自分で働いたお金で雪げたを買おうとするおみつさんの決意 (想)わらぐつを編むおみつさんの様子とできあがったわらぐつ →人柄 (想)期待 (想)遠慮がち (想)不格好なわらぐつに対する周りの反応	・たやすく ・首をかしげたみたい ・このうえなし ・横目で見る ・がんぎ ・むしろ ・あけすけ
四の場面	、初めて作ったわらぐつは、不格好でなかなか売れない。あきらめかけていると、わかい大工さんが来てわらぐつを買ってくれた。			

五年国語教材文「わらぐつの中の神様」の教材分析ＮＯ・５

場面	あらすじ	教材文	指導事項	言語事項
		り、わたしが作ったんじゃ、だめなのかなあ。」おみつさんはがっかりして、不細工なわらぐつを見つめました。 やがて、お昼近くになって、野菜はほとんど売れてしまったし、あきらめてもう帰ろうかと思っていると、おみつさんのむしろの前に、わかい男の人が立ちました。どうやら大工さんらしく、いせいのいいねじりはちまきに、大きな道具箱をかついでいます。 「あねちゃ、そのわらぐつ、見せてくんない。」 そう声をかけられると、おみつさんは、やはりきまりが悪くなって、 「あんまり、みっともよくねえわらぐつで―。」 と、赤くなりながらも、おずおずとわらぐつを差し出しました。 わかい大工さんは道具をむしろの上に置いて、そのわらぐつを手に取ると、たてにしたり横にしたりして、しばらくながめてから、今度はおみつさんの顔をまじまじと見つめました。 「このわらぐつ、おまんが作んなったのかね。」 「はあ、おらが作ったんです。初めて作ったもんで、うまくできねかったけど―。」 「ふうん。よし、もらっとこう。いくらだね。」 大工さんはお金をはらって、わらぐつのひもを慣れた手つきで結び合わせ、道具箱といっしょにひょいとかつぐと、さっさと行ってしまいました。 おみつさんは、初めてわらぐつが売れたので、うれしくてうれしくて、わかい大工さんをおがみたいような気がしました。	(想)なかなか売れないわらぐつを見つめるおみつさんの思い ・きまりが悪い ・みっともよくねえ ・まじまじ	・不細工 ・いせいのいい
五の場面	次の市でもその次の市でもあのわかい大工さんが必ず買ってくれるので、理由をたずねてみる。おみつさんは、大工さんの仕事への思いを聞き、感心し頼もしく思う。さらに、お嫁に来てくれという言葉の意味に気づく。	その次の市の日までに、おみつさんは、また一つ、わらぐつを編み上げました。前よりは、いくらか形がよくできました。 「今度もうまく売れるといいけど―。」 おみつさんが、わらぐつを持って市に出て、この前のように野菜といっしょにならべておくと、今度はあまり待たないうちに声をかけられました。 「そのわらぐつ、くんない。」 ひょいと顔を上げてみると、まあ、どうでしょう。それは、この間もわらぐつを買ってくれた、あのわかい大工さんなのです。 おみつさんはおどろきましたが、言われるままに、またわらぐつを売って、お金を受け取りました。 その次の日にも、またあの大工さんが来て、わらぐつを買ってくれました。その次も、またその次もおみつさんが市へ出るたびに、あのわかい大工さんが必ずやって来て、不格好なわらぐつを買ってくれるのです。おみつさんは、いつのまにか、その大工さんの顔を見るのが楽しみになっていましたが、こんなに続けて	(想)わかい大工さんに対する感謝 (想)わかい大工さんがわらぐつを会にきたことへのおどろき→楽しみ→不思議 おみつさんの心の動き	・ひょいと

五年国語教材文「わらぐつの中の神様」の教材分析ＮＯ・６

場面	あらすじ	教材文	指導事項	言語事項
		買ってくれるのが不思議でもあるので、とうとうある日、思い切ってたずねてみました。 「あのう、いつも買ってもらって、ほんとうにありがたいんだけど、あの、おらの作ったわらぐつ、もしかしたら、すぐいたんだりして、それで、しょっちゅう買ってくんなるんじゃないんですか。もし、そんなんだったら、おら、申しわけなくて―。」 すると、大工さんは、にっこりして答えました。 「いやあ、とんでもねえ。おまんのわらぐつは、とてもじょうぶだよ。」 「そうですかあ、よかった。でも、そんなら、どうしてあんなにたくさん―。」 すると、大工さんはちょっと赤くなりました。 「ああ、そりゃ、じょうぶでいいわらぐつだから、仕事場の仲間や、近所の人たちの分も買ってやったんだよ。」 「まあ、そりゃどうも―。だけど、あんな不格好なわらぐつで―。」 おみつさんがきょうしゅくすると、大工さんは、急にまじめな顔になって言いました。 「おれは、わらぐつをこさえたことはないけども、おれだって職人だから、仕事のよしあしは分かるつもりだ。いい仕事ってのは、見かけで決まるもんじゃない。使う人の身になって、使いやすく、じょうぶで長もちするように作るのが、ほんとのいい仕事ってもんだ。おれなんか、まだわかぞうだけど、今にきっと、そんな仕事のできる、よい大工になりたいと思ってるんだ。」 おみつさんは、こっくりこっくりうなずきながら聞いていました。自分といくらも年のちがわない大工さんが、なんだかとてもたのもしくて、えらい人のような気がしてきたのです。 それから、大工さんは、いきなりしゃがみこんで、おみつさんの顔を見つめながら言いました。 「なあ、おれのうちへ来てくんあいか。そして、いつまでもうちにいて、おれにわらぐつを作ってくんないかな。」 おみつさんは、ぽかんとして、大工さんの顔を見ました。そして、しばらくして、それが、おみつさんにおよめに来てくれということなんだと気がつくと、白いほおが夕焼けのように赤くなりました。 「―それから、わかい大工さんは行ったのさ。使う人の身になって、心をこめて作ったものには、神様が入っているのと同じこんだ。それを作った人も、神様とおんなじだ。おまんが来てくれたら、神様みたいに大事にするつもりだよ。ってね。どうだい、い	(想)おみつさんに問われて動揺する大工さん (事)大工さんは仕事に対する考えや姿勢をおみつさんに伝えている。 (想)初めは言葉の意味がわからなかったが、やがて気づいた様子。 (想)題名との関わり	・きょうしゅく ・職人 ・よしあし ・こっくりこっくり ・ぽかんとして ・夕焼けのように
六の場面(現在)	マサエは、おみつさんがおばあちゃんであることに気づく、お話			

五年国語教材文「わらぐつの中の神様」の教材分析ＮＯ・７

場面	あらすじ	教材文	指導事項	言語事項
	に出てきた雪げたを見せられる。 そこへ、おじいちゃんが帰宅する。	い話だろ。」 おばあちゃんは、そう言ってお茶を飲みました。 「ふうん、そいで、おみつさん、その大工さんのとこへおよめに行ったの。」 マサエが目をくりくりさせてききました。 「ああ、いったともさ。」 「そいでねえ、神様とまではいかないようだったけど、でも、とてもやさしくしてくれたよ。」 「ふうん。じゃあ、おみつさん、幸せにくらしたんだね。」 「ああ、とっても幸せにくらしてるよ。」 「くらしてる。じゃ、おみつさんて、まだ生きてるの。」 「生きてるともね。」 「へえ。どこに。」 おばあちゃんは、にこにこ笑っています。マサエは、お母さんの顔を見ました。お母さんも、にこにこ笑っています。 「変なの、教えてくれたっていいでしょ。」 そこで、お母さんが言いました。 「マサエ、おばあちゃんの名前知ってるでしょ。」 「うん。おばあちゃんの名前は、山田ミツ。―。あっ。」 マサエは、パチンと手をたたいて、目をかがやかせました。 「おみつさんて、それじゃ、おばあちゃんのことだったの。あら、じゃあ、その大工さんて、おじいちゃん。」 おばあちゃんはうなずいて、おし入れのたなの上を指さしました。 「あの箱を持ってきてごらん。」 マサエは、すぐふみ台を持ってきて、たなの上から、ほこりだらけのボール箱を下ろしてきました。明けてみると、つうんとかびくさいのおいがして、赤いつま皮のかかったきりな雪げたが、きちんとならんでいました。 「あら、きれいだ。かわいいね。」 「このうちへおよめに来るとすぐ、おじいちゃんが買ってくれたんだよ。だけど、あんまりうれしくて、もったいなくてね。なかなかはく気になれなかった。かざり物じゃないんだぞって、おじいちゃんに笑われたけど、そのうちにそのうちにと思っているうちに、年を取ってしまってね。とうとうそれっきりはかずじまいさ。」 「ふうん。だけど、おじいちゃんがおばあちゃんのために、せっせと働いてかってくれたんだから、この雪げたの中にも、神様がいるかもしれないね。」	(想)話に引き込まれ興味津々できいているマサエの様子。 (事)マサエは過去形、おばあちゃんは現在形での会話 (想)マサエはおみつさんがおばあちゃんで、大工さんがおじいちゃんであることを知りおどろきと同時に感動している (事)雪げたを実際に目にする。 (想)マサエの変容	・くりくり ・つうんと

五年国語教材文「わらぐつの中の神様」の教材分析ＮＯ・８

場面	あらすじ	教材文	指導事項	言語事項
		「ああ、きっといなるだろうね。だから、はけなくなっても、こうして大事にしまっとくんだよ。」 そのとき、げんかんのたたきで、カッカッと雪げたの雪をはらう音がしました。 マサエは、赤いつま皮の雪げたをかかえたまま、 「おかえんなさあい。」 とさけんで、げんかんへ飛び出していきました。	(想)飛び出して →うれしさ	・たたき